

SSSV・SCRP・国際学会参加の報告

学生短期海外交流プログラム
(SS・SV) の報告

高度口腔機能教育研究センター
石田 陽子

新潟大学歯学部では、学生短期海外交流プログラム（通称SSSV：ショートステイ・ショートビジットプログラム）を行っております。

【SV（本学学生を派遣するプログラム）】

派遣先は毎年変動します。プログラム内容は現地教員に一任しております。昨年度の参加学生の報告をお楽しみください。

2025年3月：WHO本部、スウェーデン、ベトナム、タイ

今年度は以下の派遣プログラムが決定しております。

2026年3月：WHO本部、スウェーデン、ポルトガル、ルーマニア、タイ、台湾

【SS（短期留学生受入プログラム）】

交流協定のある外国の大学歯学部から、8月と3月に短期受入プログラムを行っております。留学生は歯学部の教員から英語で講義・実習を受け、大学病院歯科部門、口腔外科手術室の見学をします。講義実習では学部生向けから将来の大学院入学を見据えた研究紹介もしております。8月のプログラムでは本学の学生実習の見学を盛り込み、自国の歯学教育との違いを体験してもらいました。多くの留学生が、「ここまで丁寧に実習書が作成され、指導教員が親切に指導してくれるとは、本当にうらやましいです！」と言ってくれました。プログラム中の放課後や休日などには本学学生と食事や観光に出かけております。



2025年3月 スキー体験



2025年8月 GCデンタルオアシス見学

コンケン大学・チュラロンコン大学SSSV参加報告

医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻 2年
穴 戸 香

2025年3月に、海外留学支援制度（SSSV）プログラムでコンケン大学とチュラロンコン大学へ訪問させていただきました。ご縁があり、歯科衛生士として参加させていただきましたので、その内容を報告させていただきます。

成田空港からタイへ入国し、バンコクから1時間飛行機に揺られコンケンへ辿りつきました。タイでの初めての感想は暑いことだったことを覚えています。雪国の冬をなんとか切り抜けた私にとってタイの暑さは大きな環境の変化を実感させるものでした。

今回私たちはコンケン大学にて主に臨床実習の見学や小学校でのボランティア活動に参加させていただき、チュラロンコン大学では、東北大学歯学部の学生と臨床現場の見学を行いました。全ての経験が貴重なものでしたが、特に2つのことが記憶に残っています。

1つ目はコンケン大学とチュラロンコン大学の主な違いについてです。コンケン大学があるコンケンは、タイの東北地方の主要都市で、日本でい

うところの仙台に当たるそうです。大学の周囲には広大な自然が広がり、その中心には大きなケンナコーン池がありました。大学自体も非常に広く、まるで1つの街のようで、大学内の移動にはバスが用いられています。地域に根付いた大学であり、私たちは小学校での学生ボランティアに参加する機会をいただきました。一方、チュラロンコン大学はタイの首都バンコクの中心に位置しています。まるで、渋谷の真ん中に大学があるような感覚と言うとわかりやすいように感じます。大きいオフィスビルのような病院の中には、最新の設備や技術が数多く揃っており、とても興味深いものでした。

2つ目は、学生の臨床経験の豊富さです。タイの歯学部では、日本のように歯科医師免許取得後の臨床研修制度はなく、その代わりに在学中に臨床実習として数多くの治療を行なっているそうです。診療所の多くは学生が診療を行うスペースとして運用されており、学生が主体的に治療に取り組んでいる様子が印象的でした。

改めまして、このような貴重な機会を与えてくださった石田先生、小川先生、引率いただきました大倉先生、お世話になった全ての方々に深く感謝申し上げます。今後もSSSVプログラムがより多くの学生の、より豊かな交流と学びの場となることを願っています。



初めてのトゥクトゥク（筆者は左端）

タマサート大学・マヒドン大学 (タイ) へのSSSVに参加して

歯学科4年 小泉文哉

2025年3月にタイでの16日間のプログラムに参加しました。前半2日間は首都バンコクのマヒドン大学を、後半の2週間ではバンコクから北へ約40キロ離れたタマサート大学を訪問しました。

マヒドン大学はバンコク市内にあり高架鉄道からも近く非常に都会的な場所にあり、建物、設備等も新しく周辺の環境とともにタイの経済的發展を感じることができました。

タマサート大学では前半の1週間は各科の講義を受け、後半の1週間は1人ずつ現地の5年生の臨床実習班に配属され実習を見学しました。

今回の訪問で印象に残ったこととしては、第1に歯科におけるデジタル技術の進歩です。プログラムの中で受けた講義ではAIを活用した画像診断や、デジタル技術を活用した設計、仮想現実の活用、AIを活用した歯蝕診断など、AIやデジタル技術に関するものが多く含まれていました。学部の3年生が終わり臨床科目を学び始めた段階ではありましたがその進歩について非常に驚かされました。

また現地の学生の英語力、特に専門分野での英語力の高さにも驚かされました。現地の学生の臨床実習を見学していると診療の内容について流ちょうな英語で解説していただき、自然とテクニカルタームが英語で出てくるためついていくのに苦労しましたが日本語が完全に通じない中1人で乗り切るといった経験は非常に鍛えられる経験でも

ありました。

今回の訪問ではバンコク周辺の地域ということもあり、タイについてそして東南アジア地域の発展についても学べる良い機会ともなりました。バンコク市内は鉄道網も発達し、巨大なショッピングモールが存在するなど非常に発展している様子が伺えました。また、タマサート大学から北に行ったところにある古都アユタヤではタイの歴史的な遺跡を見学することができたとともに、Japanese Villageという16世紀に日本人町があったことを記念する施設もあり、日本との関係の深さを知ることができました。

今回は自分自身にとって2回目のプログラムへの参加であり、前はベトナム、ハノイでのプログラムへの参加でしたが、同じ東南アジア地域であっても国によって似たような事情もあれば違うような事情があることが肌を持って体感できました。自分自身このようなプログラムに参加する価値は現地の空気をリアルに感じることでありこれまでこのプログラムへの参加を通じて感じます。現地で感じる経済発展へのスピード感は想像以上に速く、テクノロジーの進歩と可能性を考えさせられる話を多く聞くことができました。今回のプログラムへの参加を通じ、今後の最先端テクノロジーに対する理解を深め、それを活用できる歯科医師となれるよう、英語や歯学の学習についてのモチベーションも高めることができる経験になったと感じています。

最後になりますが、引率して下さった前川先生、派遣にあたりご指導して下さった石田先生をはじめ、携わって下さったすべての方々へ感謝申し上げます。

アメリカ・ペンシルバニア大学へのSSSVに参加して

歯学科4年 白髭美帆

本プログラムは、2025年3月1日から3月17日までの約2週間、照沼先生の引率のもと、歯学科5年の清水、歯学科3年の白髭の2名で参加しました。羽田空港を出発し、トロントを經由してフィラデルフィアへ入国し、3月3日よりアメリカ・ペンシルバニア大学歯学部にて臨床研修が開始されました。

プログラム初日はオリエンテーションおよびキャンパスツアーが行われ、その後、保存修復学、小児歯科、障がい者歯科、歯周病科、口腔内科、歯内療法学、補綴学、矯正歯科学、公衆衛生学など、幅広い分野の見学および実習に参加しました。小児歯科ではシーラント処置やサホライド塗布、外傷歯の修復処置を見学し、バキューム補助を行う機会もいただきました。また、障がい者歯科ではTEACCH法を実際に目にし、日本の臨床実習では得難い学びとなりました。

歯周病科ではインプラント一次埋入手術の見学を行い、学生の段階から外科的処置に関わる教育体制に強い刺激を受けました。さらに、口腔内科では生検の流れや口腔外科・病理学との連携について学び、日本との診療体系の違いを実感しました。顎矯正手術や再建手術の見学を通して、歯科医師だけでなく医師や看護師など多職種が連携す

ることで医療が成り立っていることを再認識しました。

本プログラムを通じて、私は二つの大きな学びを得ました。

一つ目は、アメリカの歯科医療の在り方を日本と比較しながら体感できたことです。日本では学生が診療に関わる範囲が限られていると感じていましたが、アメリカでは学生の段階から主体的に臨床へ関わる姿が印象的でした。歯科衛生士免許を有する立場で多くの診療科を見学させていただく中で、自身の知識や経験の不足、視野の狭さを痛感すると同時に、さらに学びたいという意欲が強まりました。

二つ目は、臨床研修以外の場面を通じて感じた、アメリカの社会的・文化的背景を含む空気感です。チリからの留学生や、ユダヤ文化を背景に持つ学生、日本で生まれ育っていない日本人学生との交流を通じて、多様な価値観や自己表現の在り方に触れることができました。これらの経験から、異なる文化的背景を理解し尊重する姿勢の重要性を学びました。

今回の留学は、歯科医師としての将来を考える上で、自分の現在地を知る非常に有意義な経験となりました。

最後に、本プログラムを企画・引率して下さった照沼先生をはじめ、小川先生、石田先生、そして現地で関わってくださったすべての方々へ心より感謝申し上げます。



小児歯科でお世話になったGreg先生と（筆者一番左）



ペンシルバニア大学在校生、チリ人留学生と共にユダヤ料理店にて（筆者右奥）

ベトナム・ホーチミン医科薬科大学とハノイ医科大学へのSSSVに参加して

歯学科3年 高 桑 滯

2025年3月1日から12日間ベトナム・ホーチミン医科薬科大学を、その後4日間ハノイ医科大学を訪問し、計16日間のSVプログラムに参加しました。訪問当時は2年生で基礎科目しか履修していませんでしたが、この期間は私の歯学部生活を大きく彩る貴重な経験となりました。

ホーチミンでは、同年代の学生が相互実習を行っていること、その手技の確かさに大きな刺激を受けました。支台歯形成や義歯製作に加え、病理学の講義も経験でき、現在履修している歯冠修復学や顎口腔機能学などの理解が格段に深まり、学びの定着にも大きく役立っています。

また、ホーチミンではう蝕の蔓延が著しく、貧富の差が治療の選択を左右し、健全歯であっても抜歯せざるを得ない現実がありました。「歯を残す」という日本の理念が、いかに恵まれた環境に支えられているかを痛感しました。一方で水道水フロリデーションなど予防意識も根付きつつあり社会全体としてう蝕予防に取り組み始めています。また、学生治療が安価に受けられる制度もあり、患者確保と経済的負担軽減につながる良い取り組みだと感じました。

ハノイではインプラント研修で豚骨実習や縫合トレーニングを見学しました。日本では学生段階でこのようなことを学べる機会が少ないため学生段階で学べる環境を羨ましく思います。

歯科以外でも多くの発見がありました。ベトナムはバイク社会で、信号があっても横断できないことが多く、毎回命の危険を感じました。う蝕が見つかったり、SIMカードが使えず現地の携帯会社で買いなおしたりとハプニング続きでしたが、そのすべてが良い思い出です。また、同じベトナムでも文化が大きく異なる点も印象的でした。日本の“出汁”に近い風味を感じる料理が多いハノイ、エネルギッシュな雰囲気と豊かな食文化を持つホーチミン。パクチーの好みさえ都市ごとに違うことを知り、まるで東京と大阪のようで大変興味深く感じました。

現地学生とは放課後を共に過ごし、強い絆を築くことができました。同年11月、彼らが来日した際に再会し、涙が出るほど嬉しい瞬間でした。また、彼らからベトナム戦争や独立の歴史を学び、自分の無知さを実感し、もっと学ばなければいけないと感じました。

この16日間の経験は歯学への姿勢を大きく変え、国境を越えた学生交流の価値を実感する機会となりました。今後の実習にこの経験を生かしていきたいと思います。最後になりますが、ご支援くださった石田先生、小川先生、引率の真柄先生に深く感謝申し上げます。



口腔外科での手術見学にて（筆者左から2番目）

WHO・マルメ大学でのSVを終えて

歯学科4年 鈴木綾乃

私は昨年度の3月にスイス・WHO、スウェーデン・マルメ大学のSVに参加しました。3月3日に日本を出発しジュネーブに5日間、マルメに12日間滞在しました。

スイスでは、WHOおよびSUNSTARを訪問しました。WHOでは、参加学生が事前に準備した質問をもとに意見交換を行い、歯科分野においてWHOが現在直面している課題について理解を深めました。国際的な立場から歯科医療の現状や将来を考える貴重な機会となり、議論も大変活発なものとなりました。SUNSTARでは、同社が取り組む研究活動や商品開発について説明を受けました。臨床現場とは異なる視点から口腔の健康を支える企業の役割を知り、歯科医療を多角的に捉える重要性を実感しました。さらに、WTOで開催された国際機関と学生の交流会では、国際機関の関係者や現地の歯学部生と交流し、視野を広げることができました。

スウェーデンでは、マルメ大学とTePeに訪れました。マルメ大学では、模型実習の見学や授業への参加、5年生による卒業論文中間発表の聴講、臨床実習の見学など、多様な教育現場に触れる機会をいただきました。学生が主体的に学ぶ姿勢や、教育システムの違いは非常に印象的でした。TePeでは、歯ブラシや歯間ブラシの工場を見学させていただき、環境に優しい取り組みについての説明を受けました。

本SVを通じて得た経験は、学術的な学びだけでなく、人とのつながりという面でも大きな意味を持つものでした。ジュネーブでの交流会や、マルメ大学主催のJapan Bridge Scandinavia交

流会に参加し、現地の方々と積極的に交流することで、プログラムの枠を超えた学びや出会いを得ることができました。

また、夏のSSで新潟大学に受け入れた学生とも再会し、彼女の自宅に招かれてKubb（棒倒しゲーム）をしたり、シナモンロール作りをしたりするなど、文化的な交流も行いました。こうした経験は、教室での学修だけでは得られない、国際交流ならではの貴重な体験であったと感じています。

初めは積極的に行動することに不安もありましたが、一歩踏み出すことで多くの学びと出会いを得ることができました。この経験を今後の臨床実習や学修に生かし、主体的に取り組んでいきたいと考えています。またこれからSVへの参加を予定している学生や、参加を検討している方々にとって、本プログラムが大きな成長の機会となることを願っています。

最後に、日本からスイス、スウェーデンまで引率して下さった竹原先生をはじめ、WHOおよびマルメ大学訪問に際しご支援くださった小川先生、石田先生、ならびに現地でお世話になったすべての先生方に、心より感謝申し上げます。



筆者左から3番目

歯学部生の今

歯学部生の今

歯学科1年 松本七香

暴風雨に驚かされ、曇天の空に飽きてきた師走に「歯学部生の今」というお題の原稿依頼が届きました。せっかくの機会ですので、入学してからを振り返りながら執筆することにしました。

全員が受験に向けて勉強を第一にしていた高校生の時と異なり、各々が別々の目標をもって生活をしています。大学1年生ということもあり、比較的、単位習得は容易です。1学期は早期臨床実習と歯学スタディスキルズが毎週金曜日に旭町キャンパスでありました。早期臨床実習では歯学部に入學した実感と歯科医師の卵としての自覚が芽生えました。しかし、残念なことに2学期は歯学部の専門科目がありません。「早く専門科目について学習したい」と、はやる気持ちを抑えながら、教養人になるべく、幅広い分野を履修することを心掛けました。これまでの学習とは異なり、社会福祉学やストレスマネジメントといった生活と直結している学問や反対に心理学のような抽象的な学問について学習することができ、興味深かったです。

勉強以外にもたくさん経験した一年でした。私は歯学部の軽音楽部に所属しており、キーボード担当として、バンドを組んでいます。年に5回ほどライブがありますが、その都度バンドを組んで出演しています。そのため同級生と出演することも

あれば、先輩と出演することもあります。軽音は初心者で、わからないことだらけですが、経験者の同級生や先輩に教えていただきながら楽しんでいます。

大学には年齢や出身地、入学までの経緯等、様々な人がいます。半年以上が経ち、友人たちと入学時よりも深い話ができるような関係性になりました。経験してきたことが全く違うので、価値観が異なり、話していてとても楽しいです。自由に使える時間が増え、遊びに行ける範囲も広がったので、初めて経験することもしばしばあります。何事も新しいことというのは面白いものです。失敗が許される大学生のうちに沢山のことに挑戦していきたいです。

また、2学期になるとバイトを始める友人も多いです。バイト先の珍事を話すと、友人達からも面白いエピソードがいくつも出てきます。いろいろな職場について知ることができ、興味深いです。私はオンライン家庭教師と結婚式場のバンケットスタッフの二つの職場で働いています。まったく違う職場ですが、日々学ぶことが多くあります。将来の職とは関係ないバイトをあえてすることで、視野を広げ、より人間としての深みを増していきたいと考えています。

後3か月ほど過すと2年生に進級し、いよいよ歯学部生として本格的な勉強が始まります。自分が目指すべき姿を見失わないよう、勉強に励みつつも大学生活を謳歌したいです。

歯学部一年の今

歯学科1年 須藤泰斗

歯学部に入學して一年目の現在は、まだ専門的な歯学の授業が始まっていない。授業は、一般教養の科目が中心で、幅広い分野に触れる時間が続いている。心理学、統計学、語学など、高校ではあまり馴染みのなかった内容も多く、新しい知識に触れる面白さと、大学ならではの難しさを同時に感じている。

一般教養の授業は、歯科医療と直接結びついていないわけではないが、学んでいくうちに「これは将来にもつながるかもしれない」と思う瞬間がある。心理学で学ぶ人の心の動きやコミュニケーションの考え方は、患者さんと接する際に役立つそうだし、統計学で身につくデータの扱い方は、研究論文を読むときに必要になるだろう。語学の授業では、海外の文献に触れる機会が増える将来を考えると、基礎力をつける良い時間だと感じる。今はまだ歯学そのものに触れる機会は少ないが、こうした基礎的な学びが、これから専門科目に進むための土台になっていくと実感している。

大学生活のもう一つの大きな柱になっているのが、歯学部のバスケットボール部での活動だ。練習は決して楽ではないが、汗をかくと頭がすっきりし、日々の疲れもどこかへ消えていく。男子校出身の自分にとって、この部活の空気はどこか落ち着く。高校時代は、良くも悪くも男子だけの世界で、変に気を遣う必要もなく、素のままでいられた。大学に入ってから、男女が混ざる空気に最初は少し緊張したが、部活では高校の延長のように自然体でいられる。部活の仲間は同じ歯学部ということもあり、授業のことや将来の進路につ

いて気軽に話せる存在だ。専門科目が始まる前の段階でも、互いに励まし合いながら過ごせる環境はとても心強い。

また、部活動を通して先輩と関わる機会も多く、大学生生活の過ごし方や勉強のコツ、専門科目が始まってからの様子など、実際の経験に基づいた話を聞けるのは大きなメリットだ。先輩たちが忙しい中でも部活を続けている姿を見ると、自分もこれからの学びに向けて頑張ろうという気持ちになる。部活は単なる運動の場ではなく、大学生生活全体を支えてくれる大切なコミュニティになっている。

大学では自由な時間が増える一方で、自分で時間を管理する必要がある。一般教養の課題やレポートは思ったより多く、締め切りに合わせて計画的に進めなければならない。高校のように細かく管理されるわけではないため、最初は戸惑うこともあったが、授業と部活動を両立する中で、少しずつ自分なりのペースがつかめてきた。忙しいと感じることもあるが、その分だけ充実感も大きい。

歯学部一年生の今は、専門的な学びが本格的に始まる前の準備期間である。焦る必要はなく、まずは基礎をしっかり固めることが大切だと思う。一般教養で得た知識や考え方、部活動での経験、仲間とのつながりは、これからの大学生活や将来の自分を支える大切な土台になるはずだ。

これから専門科目や実習が始まれば、忙しさはさらに増していくと思う。それでも、一年生として過ごす今の時間は、大学生活の基礎をつくる重要な時期だ。日々の学びや経験を積み重ねながら、少しずつ歯学の世界へ近づいていきたいと考えている。

歯学部生の今

歯学科2年 雨海祐花

早いもので、もう歯学科二年の後期が終わりを迎えようとしています。後期では前期と比べてグループでの活動や実習が増え、歯学部生としての自覚を強く持つようになりました。課題や試験に追われる日々ではありますが、その分、一日一日が充実しており、自分が確実に前に進んでいることを感じています。

そのような中で、私を大きく支えてくれた存在の一つがバドミントン部です。練習や試合を通して、先輩方からは技術面だけでなく、忙しい中でも学業と部活動を両立させる姿勢や、物事に真摯に向き合う大切さを学びました。また、部活動の場にとどまらず、学業面での悩みや勉強方法についても、先輩方は快く相談に乗ってくださいました。試験前に不安を感じたときや、授業内容の理解に行き詰まったときに、経験を踏まえた助言をいただけたことは、大きな心の支えとなりました。後輩の存在もまた、自分にとって良い刺激となりました。私が教えられることは多くはありませんが、教える立場になることで、自分自身の行動や言動に責任を持つようになり、少しずつ成長できていると感じています。バドミントン部は、心身のリフレッシュの場であると同時に、人とのつながりや支え合うことの大切さを実感できる場所です。

学業面では、図書館で共に勉強する友人の存在も欠かせませんでした。難しくなっていく授業内容に不安を感じることもありましたが、同じ目標を持つ仲間と励まし合いながら勉強することで、前向きに取り組むことができました。分からない部分を教え合ったり、時には何気ない会話を交えながら長時間机に向かったりする時間は、私にとって大切な思い出です。一人では乗り越えられなかったであろう、二年生の鬼門と呼ばれる前期の期末試験も、友人の存在があったからこそ乗り切れたのだと思います。互いに支え合いながら努力できる仲間恵まれたことに、心から感謝しています。

忙しい日々の中で、時間の使い方や物事への向き合い方にも変化が生まれました。限られた時間を意識的に使うようになり、優先順位を考えて行動する力が少しずつ身についてきたと感じています。また、思うようにいかないことがあっても、すぐに諦めるのではなく、どうすれば乗り越えられるかを考える姿勢が身についたことも、自分の成長の一つだと思います。

歯学部での学びは決して楽なものではありませんが、多くの人に支えられながら過ごしたこの日々は、私にとって大きな意味を持つ時間でした。これからさらに専門性が高まり、忙しさも増していくと思いますが、これまでの経験を糧に、歯科医師を目指す学生として、そして一人の人間として成長し続けていきたいです。

歯学部生の今

歯学科2年 石川 凌久

入学しておよそ2年が経とうとしている今、自身の歯学部生としての生活を振り返る機会をいただけたので、2年生での生活を通して感じたことについて書いていこうと思います。

2年生での生活は、1年生の頃と比べると格段に忙しくなったと感じています。1年生の頃は比較的自由な時間が多く、余裕を持って生活していましたが、2年生になると毎日のように授業があり、1年生がいかに緩かったのかを実感しました。また、1年生は高校の延長線上の内容の授業が多かったように思いますが、2年生からは少し専門性のある内容の授業となり、内容が難しく、勉強に要する時間が増えました。そのうえテストが1つ終わったと思ったら別の教科のテストが近づき、各教科のテスト勉強が大変で目が回りました。特に、9月に前期日程の各教科のテストがまとまって行われた時は、友人と朝やお昼くらいから図書館へ行き、夜の10時まで勉強するという生活を送っていて、地元の友人が遊んでいる様子を見て、羨ましさを感じることもありました。

現在、9月の怒涛のテスト期間を無事に終えて、後期日程に入っています。後期日程は部活の先輩から比較的余裕があると聞いていて、遊んだり旅行に行ったりできるだろうかと楽しみにしていました。確かに前期日程と比べて授業のコマ数

が減り、好きなことに費やす時間は少し出来ましたが、後期日程は実習や発表系の授業が多く、実習のレポートを書いたり、発表のスライドを作成したりと、やらないといけないことは多々ありました。こうして原稿を書いている今も、テストまで後3日に迫っています。年末年始の休暇を実家でゆっくり過ごしたことを後悔しています。今日も朝から図書館へ行き、勉強の傍ら、原稿を仕上げています。

ここまで読むと、歯学部の大変さばかりが目立ち、なぜこの学部を辞めないのかと疑問を思う人もいるかもしれませんが、歯学に興味があるということや、たった2年しかこの学部に通っていないということもありますが、普段の授業では、臨床や国家試験の話と結び付けて教えてもらえ、今受けている授業が今後、どういう所に役立つのかを認識でき、今後への興味が高まりました。また部活の先輩や先生と話をする機会が何度かあり、3年生以降の学年ではどういうことを勉強するのか、卒業した後はどういう環境が待っているのか、今後の話を聞くことが自身の勉強の糧になることもありました。このように、将来のために頑張りたいと思える環境がこの大学には整っていると私は思います。

最後に、私はバレーボール部に所属していて、部員が少ない状況の中、部員同士で協力して練習を行っています。もしこの文章を読んでいるあなたが新入生なら、4月の部活動体験期間、ぜひバレーボール部に見学しに来てください。

折り返し地点に立って

歯学科3年 神向寺 咲

10月から後期授業が始まり、私の学生生活は大きく変化した。これまでの基礎科目を主とした座学の毎日から一変し、歯科医師としての第一歩を実感させる本格的な実習が始まった為である。白衣を着て、実習室という新たな環境に身を置く中で日々多くの刺激を受けている。

現在、実習の対象となっているのはファントムと呼ばれる人間の口腔内を精密に再現した模型である。まだ実際の患者さんを診るわけではないが、この模型と向き合うだけで、これまではなかった緊張感が走る。目の前には、これまでの講義では触れる機会がなかった数多の歯科用器具が並んでいる。その一つひとつの形状や用途を確認するたびに、歯科分野の専門性の高さと、これまでの技術の発展を強く実感するとともに、これらを全て使いこなさなければならないというプレッシャーも感じた。

実習が始まったばかりの頃は、まさに苦勞の連続であった。器具の名前や細かな形状の差を覚えるだけでも一苦勞で、どれをどの場面で使うべきか判断するのも時間もかかった。前日に実習書を読み、手順を追って予習をしても、いざ実践となると全く勝手が違う。模型の顎の角度やミラーでの視認など、教科書には書かれていない細かな調整に手こずり、思うように作業が進まないことが多々あった。

特に、自分の思い描く通りの形に処置ができな

い時のもどかしさは大きく、心身ともにしんどさを感じることもあった。どれだけ準備をしても実際に手を動かしてみなければ分からない難しさを痛感した。

しかし、回数を重ねるにつれて扱いにくかった器具の感触に慣れ、操作に伴うストレスが少しずつ軽減されていくのを感じた。最も大きな変化は、これまで机上で学んできた知識が実際の処置という行動と一つに結びついてきたことである。「なぜこの角度で削るのか」「なぜこの器具を使うのか」といった知識が臨床現場を想定した動きの中で腑に落ちた時、言葉にできない喜びがあった。ただ覚えた知識が実践的な技術へと変わっていく過程は充実感がある。

また、実習環境における人間関係にも助けられている。自分一人では解決できない困難に当たった時、先生方や先輩方は非常に丁寧に指導してくださり、自分では気づけなかった癖や問題点を明確にしてくれる。まだ自分の技術は決して上手くなく、手際の悪さに落ち込むこともあるが、そうした周囲の支えがあるからこそ、前向きに取り組むことができている。

講義室で静かに教科書をめくっていた頃に比べ、実習は格段に刺激的である。実際に手を動かすことで初めて、歯科技術の習得がいかに繊細で困難な作業の積み重ねであるかを身をもって知ることができている。この難しさを実感することは将来、患者さんの口腔内を預かる責任の重さを知るための第一歩だと思っている。今のこの感覚を忘れず、一步ずつ着実に技術を磨いていきたいと考えている。

歯学部生の今

歯学部歯学科3年 末 永 蒼 空

私の歯学部での3年生後期の学生生活を振り返ると、これまでの大学生活の中でとりわけ密度が濃く、そして最も厳しい時期だったと感じている。今思えば、2年生や3年前期までは基礎系の学科目の講義が中心で、試験日が迫ってくる焦りと緊張感がありつつも、心身ともにわずかに余裕を持っていたように感じる。しかし後期に入ると、講義内容は一気に専門性を増し、歯学部生としての本番が始まったことを強烈に実感させられた。

例えば、齶蝕学や顎口腔機能学といった、歯科における臨床的な講義が始まり、試験の内容もより歯学部らしくなったことを鮮明に覚えている。その一方で、これまでと大きく異なる点は、やはり実習の存在である。保存修復学や歯冠修復学、歯の形態学といった実習科目がはじまり、3年後期ではこれらの科目がひと際、大きな存在感を放っていた。

実習では、歯科医療に必要な繊細さと厳しさを、身をもって知る時間だった。模型や図で理解したつもりになっていた歯の形態も、実際に再現しようとしても、その複雑さや手技の困難さに何度も悩まされた。

とりわけ歯冠修復学の実習では、わずかな形成量や角度の違いが後々の工程に大きな影響を及ぼし、結果を大きく左右してしまう。毎時間自分の未熟さによる失敗を経験し、自分の至らなさをひどく痛感した。実習書の通りに進めているつもり

でも、実際に自分の行っている作業の意義を理解できているのか、上手に行えているかなどの疑問がふと浮かび上がり、不安に駆られてしまうことも多い。その不安を抱いたまま作業を進めていくと、過去の自分のミスが重なり、不安が現実となって模型上に表れてしまう。これは数秒という短いスパンで起きることもあれば、回をまたいで発覚することも多く、歯科医療では一つひとつの操作に意味があり、妥協は許されないのだと気を引き締めた。その度にうまくいかなかった理由を分析し、改善に努めることを繰り返した。この積み重ねこそが、将来臨床に立つための確かな土台になるのだと感じている。

さらに、3年生後期は時間の使い方の重要性を強く意識するようになった時期でもある。限られた時間の中で、講義、実習、試験対策をこなすには、優先順位を考えながら行動しなければならなかった。無駄な時間を減らし、短時間でも集中して取り組む工夫をするようになったことは、今後の学生生活だけでなく、社会に出てからも役立つ力になると感じている。

今、こうして振り返ると、歯学部3年生後期は、私にとって大きな成長の期間だったと思う。厳しい経験を通して覚悟が生まれ、歯科医師を目指す気持ちがより明確になった。これまでの自分の甘さを打ち壊し、培った忍耐力や努力する姿勢は、今後の臨床実習や国家試験に向けた大切な土台になるのだと確信している。過去の努力が現在の自分を支え、現在の積み重ねが未来を形づくる。その連なりを意識しながら、これからも一歩ずつ前に進んでいきたいと思う。

2025年を振り返って

歯学科4年 黒米 舶斗

今回は、歯学科4年生の後期の様子と私の大学生活についてご紹介したいと思います。

後期は前期までの授業に比べ、実習が一気に増えました。前期以前は、一週間のうち1~2つだったのですが、後期に入ると12月までに4つに増え、そして、1月からは5つの実習に取り組むこととなります。また、これまでほとんどなかった5限まで授業のある日が多い週で4回に増えました。5限の終わる時間が18時なので、遅い日ですとその時間まで学校にいる日も増え、私たちは気が付くと1週間が終わっているような目まぐるしくも充実した学校生活を送っています。実習を行うにあたり、私たちは実習書や動画を見て、事前に予習をしてから実習に臨んでいます。実習書や動画では簡単そうに行っているように見えるものでも、いざ自分でやってみると意外と思った通りにできないことがたくさんあり、実際にやってみるものの難しさを日々感じています。そんな中で、実習物を失敗してやり直しになったり、心が折れそうになったりしても、私たちはそれにめげずに頑張ってお実習に取り組んでいます。現在行っている実習の中で、一昔前にはなかった新しい取り組みを行っている実習があります。それは、部分床義歯実習内のCAD/CAMの実習です。この実習ではRPIクラスプをパソコンで設計しました。それぞれの箇所の高みや幅を数値としてみることで、修正を容易に行うことができたりして、まだ感覚的にワックスアップしたものが適切な厚さになっているか判断がつかない私にとって、非常に便利なツールであると感じまし

た。私たちは後期の初めに技工所見学に行っています。そこでも、CAD/CAMは主力として用いられており、私たちの世代が歯科医師として働く頃には、身に付けておかないといけない技術であると強く実感しています。

さて、私事ですが去年はコロナ禍にできなかった青春を取り戻す1年でもありました。私は中高とラグビーをやっていたのですが、高2の時はコロナでほとんど活動ができず、高3の5月で引退してしまっただけで、高校では不完全燃焼で部活を終えていました。そのため大学でまたできればうれしいなと思っていたのですが、新潟大学の歯学部にはラグビー部はなく（あった頃の先輩方が羨ましい限りです笑）、歯学部の他の部活に所属しました。所属した歯学部の部活では先輩や同期、後輩に恵まれ、楽しく活動していたのですが、心のどこかでラグビーをしたいという気持ちがくすぶっていました。そんな折、縁あって医学部のラグビー部の活動に昨年参加することになりました。今は自分ひとりでは成せない集の力の魅力をかみしめつつ、高校時代の分まで楽しんでます。そんなこんなで、部活2つにバイト、そして勉強とハードな1年でしたがとても充実した1年でした。

最後に私たちは今年7月にCBTとOSCEを控えています。これを無事通ると、いよいよ臨床実習です。臨床実習では、実際の患者さんを担当することになるので今から気が引き締まります。そして、我々4年生は国家試験でこのまま全員合格すると6か年ストレートの合格率が87.5%になる学年です。学年一丸となり、お互い切磋琢磨、協力しあいながら、今後とも勉学に励んでいきたいと思っています。

歯学部生の今

歯学科4年 山田佳奈

この度、歯学部ニュースの執筆を担当いたします。歯学科4年の山田佳奈です。ソフトテニス部に所属しています。講義に実習に課題、そして部活動に追われる毎日で、気がつけば大学生活4年目ということで時間の早さに驚かされます。今回は、長いようで短かったこれまでの学生生活を振り返ってみたいと思います。

まず1年生から3年生までは、とにかく試験の多さが印象に残っています。大学生活に慣れないうちから大量の試験に臨むことは大変ではありましたが、その分、努力を積み重ねる力が身についた時期でもありました。

3年生後期から4年生前期ではう蝕学、口腔外科学、小児歯科と矯正歯科からなる成長発育学など歯科に特化した科目が増え、実際の患者さんの症例写真を目にする機会も多くなりました。歯科医師を志す実感が少しずつ湧いてきたのも、この頃です。5月に行われた運動会では、4年生の持ち前の真面目さと協調性が発揮され、総合2位という結果を得られました。私は毎年、大縄跳びとリレーに出場しています。夏休みには、暑さで知られる熊谷でデンタルが開催されました。試合も他大学との交流も大いに楽しむことができました。私自身、このデンタルをもって部活動を引退しましたが、想像以上にはまり、辞めずに最後まで続けられたことに自分でも驚いています。

現在執筆している4年生後期は、歯周病学、歯科矯正学、歯内療法学、欠損補綴学など、週4日実習が続く非常に忙しい日々です。私は実技が得意とはいえず、進度も遅めで、技工物もまだまだ改善の余地が大きいと感じています。それでも先生方が丁寧に指導くださり、疑問にも納得のいくまで説明して下さるおかげで、少しずつ成長している実感があります。まだまだできないことは多いですが、ひとつひとつできることを増やしていけるよう、これからもがんばってまいります。

これから雪の季節を迎えます。県外出身の私にとって、雪が当たり前のように降る環境は、新潟に来て4年経った今でも不思議な感覚があります。雪が積もり道が凍ると、一歩踏み出すだけでも苦労するほどで、その中で大学へ向かうのは簡単ではありません。それでも5年生でのCBTやOSCE、6年生での国家試験に合格し、歯科医師になるという目標のためがんばりたいと思います。



歯学部生の今

歯学科5年 溝口 宗一郎

歯学科5年生に在籍しております、溝口宗一郎と申します。この度「歯学部生の今」というテーマで原稿執筆のお話をいただきましたので、現在の学生生活について、ありのままをつらつらと書いていこうと思います。後輩の皆さんや、(もしかしたら)入学志望の皆さんの参考になれば幸いです。

現在5年生は臨床実習として、大学病院の歯科外来で、患者さんの治療や各診療科の見学を行っています。私が受験生だった頃、本学の面接試験で志望動機の一つとして挙げたのが、他ならぬこの臨床参加型の臨床実習です。当時は漠然と、「とにかく大学に合格して進級して、この実習に参加していれば自然と技能が身につくのだろう」という甘い考えでしたが、実際に10月から約3ヶ月間実習を経験してみて、ただ漫然と“そこにいる”だけでは身にならないのだなと感じます。まず前提として、この実習は受け持ち患者制、つまり年間を通して受け持つ患者さんが基本的に変わらないので、先輩から患者さんを引き継いだ時点で、治療部位が多くある患者さんを引き継いだ学生は忙しくなりますし、治療部位がほとんどない患者さんを引き継いだ学生はやる事が比較的になくなります。この時点で、学生によってかなり差が生じます。私は後者なのですが、こうした場合には各診療科の見学を主にすることになります。臨床実習では「ミニマム・リクワイアメント」という、修了に必要な最低要件が定められており、診療科ごとに「見学〇件、治療〇件」といっ

たような目標設定があります。これを達成するために、引き継ぎ時点で治療が少ない学生は見学を優先してスケジュールに組み込むこととなります(治療は新患の患者さんを待つか、他の学生の患者さんを部分的に担当する場合もあります)。見学とはいっても、いずれ歯科医師になった際にはその治療を自分ですることになるので、術者目線に立って、「なぜこの器具・材料を使っているのか」「処置の際、自分だったらどこに気をつけるか」といった疑問点や要点を考えながら見ていないと、ただ立っただけになってしまいます。まさに、“見て学ぶ”姿勢が重要なのだと思います。

もちろん、治療に際しても主体的な学習が必要になります。治療前に当日の診療の流れや準備する器材などをまとめたレポートを提出したり、治療によっては模型上で支台歯形成や充填を練習した上で診療に臨むこととなります。私はCR充填やリライニングなど、比較的侵襲の少ない診療しかしていませんが、それでも緊張しましたし、疑問や不安を解消するためにも、治療前に予習しておくことの重要性を痛感しました。

ここまで偉そうに書いてきましたが、これはほとんど反省に基づいて書いています。見学の際にアシストで精一杯になってしまい、「質問ある?」と聞かれて答えに窮してしまったり、治療の際に器材の準備不足で何度も材料を取ってこないといけなかったりと、事あるごとに未熟さを痛感する毎日ですが、“学生さん”として手取り足取り教えていただける貴重な1年間を無駄にする事なく、より多くを吸収できる実習生活を送ってきたいです。

歯学部生の今

歯学科5年 相原礼奈

共用試験であるCBT・OSCEに無事合格し、臨床実習が始まってから早くも2か月が経ちました。このたび歯学部ニュースへ寄稿する貴重な機会をいただき、日々の臨床実習を振り返るとともに、今感じている思いを言葉にできることを大変ありがたく感じています。

新潟大学歯学部の臨床実習では、一口腔単位の実習として、約1年間にわたり数名の患者さんを担当します。各専門診療室から派遣される複数のインストラクターの先生方のご指導のもと、診療計画の立案から治療の実施までを経験し、これまで講義や基礎実習で学んできた知識が、実際の臨床と少しずつ結びついていくことを実感しています。

初めて診療に臨んだ日の緊張は、今でもはっきりと覚えています。患者さんを前にすると、理解しているつもりだった知識が思うように使えず、自分の未熟さを痛感する場面が多くありました。しかし、その一つ一つの経験が「もっと学ばなければならない」という気持ちにつながり、勉強への大きな原動力になっています。これまで学年全体で同じ課題に取り組んできた学生生活とは異なり、臨床実習ではそれぞれが自分自身の課題と向き合い、主体的に学んでいく姿勢が求められてい

ると感じています。

そのような中で、まだまだ未熟でひよっこの私たちに対し、インストラクターの先生方が根気強く、丁寧にご指導くださっていることには、感謝の気持ちしかありません。さらに、長い診療時間にもかかわらず、学習の機会を提供してくださる患者さんの存在なくして、私たちの臨床実習は成り立ちません。学生である私たちを信頼し、診療にご協力くださる患者さん一人ひとりに、心から感謝しています。

臨床実習が始まってから、特に強く感じているのが同期の存在の大きさです。分からないことを気兼ねなく相談でき、知識や資料を惜しみなく共有し合える57期の仲間がいるからこそ、不安や戸惑いの多い実習にも前向きに取り組むことができます。誰かが悩めば自然と支え合い、誰かが成長すれば自分のことのように喜べる関係は、これまでの5年間を共に過ごす中で培われてきた信頼だと思います。これからの1年間で、その絆はさらに深まっていくと感じています。

歯学部生活も残りわずかとなりましたが、今はこれまでの歯学部生活の中で最もやりがいと充実感を感じる日々を送っています。初診の際に感じたあの緊張感と、一つ一つの診療に真摯に向き合う今の気持ちを忘れることなく、同期とともに、残された歯学部生活を全力で駆け抜けていきたいと思っています。



著者は写真の一番右

歯学部生の今

口腔生命福祉学科1年 牛戸風歌

新潟大学に入学してから、あっという間に雪の降る季節になってしまいました。雪の中、受験会場まで歩いたあの日を懐かしく感じます。大学生になって初めての一人暮らしは、慣れない環境での生活に不安もありましたが、今では友達とお鍋パーティーをするなど新潟の冬を楽しんでいます。今回は前期に行われた実習と、私が所属している部活動についてお話します。

まず初めに早期臨床実習についてです。名札を付け、白衣を着て病院に入るときはいつも、医療従事者であることを実感しました。病院見学では、実際に治療の様子を見たり、器具に触ったり多くのことを体験することができました。特に印象に残ったことは、患者役実習です。6年生の先輩に自分の歯を見てもらったこの実習では、医療従事者となる前にまず、患者さんのことを考える大切な機会となりました。次に何をされるのかわからない状態において、患者さんが怖いと感じる前に、患者さんに寄り添う声掛けが大切であることを学びました。また、実際にバキュームを使ったり、歯の状態を記録したり初めてのことに挑戦することができました。まだまだ慣れないことばかりでしたが、これから頑張っていきたいと思いました。

次に部活動についてです。私は現在陸上競技部に所属しています。今年の夏に佐渡島で行われたオールデンタルでは、総合優勝をすることができました。自分の専門種目以外の競技に出場したり、他大学の人と交流できたりたくさんの思い出を作ることができました。最後までバトンを繋ぎ走ったりリレーでは、先輩たちとたくさん練習した成果を発揮することができました。総合優勝が発

表されたときには、選手一人ひとりが頑張っただけではなく、支えてくれたマネージャーさんも含め、みんなで頑張ってきた結果でとてもうれしく、思わず飛び跳ねてしまいました。大きなトロフィーを囲み部員みんなで撮影した写真は私の宝ものです。

最後に、この1年は多くの新しいことに挑戦することができ、多くの経験を自分のものにすることができました。友達と協力しながら取り組む課題や、高め合い励まし合う部活動も大変なことや辛いことも多いけれど、そのおかげでとても充実した大学生活を送ることができていると思います。来年はさらに専門分野が増え、忙しくなると思いますが、自分を成長させてくれる大切な機会だと思い取り組んでいきたいです。



「佐渡島オールデンタルにて」筆者は左から3番目

ロマンは外に、リアルは口内に

口腔生命福祉学科1年 田中奏早

新潟大学に入学してから気づけば半年以上が過ぎました。そして、この原稿を書いている12月5日——ついに新潟で今年初めての雪が降りました。新潟生まれで雪には慣れてはいるはずなのに、窓の外にひらひら舞い始めた雪を見た瞬間、“私の物語が始まる”気持ちになるのはなぜですかね。毎年見ているのにいまだに雪にロマンを感じてしまうのは地元民の初期設定なのかもしれませんね。それでは、興味の有無に関わらず、私の大学生活ストーリーをお届けします。なお、「ロマンは外に、リアルは口内に」というタイトルは、皆さんの目を引きたくて遊び心を込めてしまったため、本文とは関係ありません。でも、ほんの少しでも興味を持っていただけたなら作戦成功です。それでは、ここから真面目に1年を振り返ります。

私は新潟出身のため、慣れ親しんだ場所で大学生活を始めることができましたが、入学して感じた一番の変化は、全国から集まった多くの仲間との出会いでした。それぞれの歩んできた道、物事の捉え方の違いに触れるたび、自分の世界が一気に広がっていくのを感じます。その広がりよりも強く感じたのが、学部・学科を越えた人とのつながりです。授業や部活を通して医学部や歯学科の方々と関わる中で、前向きな姿や考え方に触れる機会が増えました。正直、尊敬する人が多すぎて毎日軽く反省会を開きます。尊敬に圧倒されて終わらせず、自分自身が胸を張れるように努力していきます。また、口腔生命福祉学科には少人数だからこそ深く関われる仲間がいます。皆が温かく、ユーモアがあって、夢に向かって努力している人たちです。同じ道を目指しながら支え合える仲間がいることに心から感謝しています。2年生からはより多くの時間を共にすることになると思いますが、この最高のメンバーとなら何でも乗り

越えられる気がします。どうぞよろしくお願い致します。

そして何より、学科の仲間をはじめ、学科を越えて出会ったすべての友達が、私の大学生活を最高にしてくれています。カラオケでランキング100位まで歌い切る謎の耐久戦を始めたり、何をするかはとりあえずじゃんけんで決めたり、将来の結婚時期を真剣に話し合ったり、食べ放題で元を取ろうとしすぎて体調を崩したり、もうよく何をしているのかわかりませんが、とにかく毎日楽しくてたまりません。

これらの最高な出会いに加えて、入学したばかりの時期に大きな学びを得る機会もありました。それは、早期臨床実習です。同じ班の仲間と一緒に様々な診療科を見学し、先生方から直接お話を伺うことができました。専門的な治療の現場を間近で見ること、これから自分もこういう学びをしていくのだと思い、興味がますます膨らみました。多くのことを学んだ実習でしたが、どの診療科でも共通していたのは、患者さんの不安に寄り添う姿勢が大切にされていたことです。口の中の治療は自分で見ることができないため、患者さんは不安を抱きやすいと思います。私も患者役実習の時に治療台に座った際、その不安を想像することができました。この実習を通して、患者さんに寄り添い、安心して治療を受けてもらえるような関わり方を大切にしたいと思いました。

2年生からは旭町キャンパスに移り、歯科医療の専門的な学びが本格的に始まります。将来、患者さんの健康を支える一員として、不安に寄り添い、信頼される歯科医療人を目指して、残りの大学生活を大切にしていきます。

最後になりますが、共に励む同期の皆さん、頼りになる先輩方、そして温かくご指導くださる先生方に感謝申し上げます。未熟な私ですが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。ロマンを胸に、リアルと向き合い、歯科の道を進んで参ります。意味の分からない伏線回収となりました。御清覧ありがとうございました。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科2年 青木結衣

旭町キャンパスへの通学にも慣れ、冬期休暇が近づいてきたころ、歯学部ニュース執筆の機会をいただきました。私は自身が受験生のとき、この「歯学部生の今」を読みながら大学生活への期待を膨らませていました。そのため、今度は私の文章が未来の歯学部生にとって、学びのモチベーションとなれば嬉しく思います。

現在、口腔生命福祉学科2年生は、座学での講義がほぼなく、相互実習やPBLを中心とした学校生活を送っています。今回の「歯学部生の今」では、医療系学部ならではの特色である相互実習について、主にお話したいと思います。相互実習では、学生同士で術者役と患者役を交代しながら、基本的な歯科衛生士の業務を練習しています。毎回の予習・復習や当番の仕事など、取り組むことが多く、最初は戸惑うこともありましたが、回数を重ねるうちに、徐々に計画的かつスムーズにできるようになりました。傷つけてしまわないかと震えながら探針で歯を擦過したことや、友人に口腔内を見られるのを恥ずかしく感じていたことが、今では懐かしく思い出されます。ある先生に通りすぎ「似合わないね」と言われたユニフォームも、今では少しずつ様になってきたのではないかと思います。

相互実習を通して、人間の口腔は想像以上に狭く、繊細な構造であることを実感しました。座学や動画で学ぶことと、実際に口腔内に触れることでは多くの違いがあり、相互実習では苦戦することも少なくありません。私は上手いかわないことがあるとすぐに落ち込んでしまう性格ですが、実

習を経て、「先生や友人からのアドバイスを受けられるようになった」という経験が積み重なり、それが自信につながりました。また、相互実習では細やかな声掛けなど患者役への配慮が欠かせず、技術だけでなく広い視野も求められます。こうした経験を通して、相互実習は私にとって人間的な成長の場にもなっていると感じます。

実習中は、先生方にご丁寧に指導いただきながら、学科の友人とコツを共有しあい、協力して取り組んでいます。2年生になり、PBLでのグループワークや、毎回ランダムに組まれるペアでの相互実習を通して、学科内のさまざまな学生と関わる機会が増えました。現在では、互いに声を掛け合い、意見や疑問を共有しやすい雰囲気学科全体に広がっていると感じます。他人の歯を扱うことにも慣れてきましたが、その慣れが重大な医療事故につながらないように、感染対策の実施を含め、常に緊張感をもって実習に臨んでいきたいと思っています。

「歯学部生の今」というテーマにちなみ、授業以外の話にも触れると、旭町キャンパスは新潟駅や古町に近いことが魅力の一つです。1年次に比べると確実に忙しくなり、歯学部生であることを実感したこの9か月間でしたが、空きコマに友人とキャンパス周辺のおしゃれな喫茶店を巡る時間が日々の活力となりました。こうした日常を重ねる中で、新潟大学歯学部を選んでよかったと改めて感じます。

3年生からは、新たな福祉学の学習に加え、臨床現場での実習も始まると聞き、忙しさを想像すると身の引き締まる思いです。これまで以上に高い意識を持ち、一つ一つの学びを大切にしながら過ごしたいと思っています。

口腔2年の今

口腔生命福祉学科2年 伊藤彩乃

口腔2年生となった私たちは、講義が中心だった前期とは異なり、後期から初めての相互実習や模型実習に取り組んでいます。ユニフォームを着て実習を行うようになり、歯科衛生士になるのだという実感がより一層湧いてきました。前期に講義で学んだ知識を実際の行動に移すことには、当初大きな緊張がありましたが、友人と励まし合いながら乗り越えることができたと思います。

まず、半年間の実習を通して学んだことについて述べます。毎回の実習では、先生方がデモンストラーションをしてくださいます。それを見て手順を理解することはできても、実際に自分でスケーリングやブラッシングを行ってみると、難しさを感じる場面が多くありました。私は処置に集中しすぎてしまい、自分のどこが悪く、なぜ上手くできないのかに気付けないことがよくあります。しかし、そういう時患者役の友人や担当の先生方からの指摘によって、自身の弱点に気付くことができ、とても感謝しています。

相互実習は、実際の患者さんに処置を行う練習であるだけでなく、歯科衛生士としての望ましい行動や望ましくない行動を互いに学ぶ機会でもあると、実習を通して感じました。実習前は、処置や患者さんへの指導内容についてばかり考えていましたが、声かけなどの患者さんへの配慮や、ユニットやライトのセッティングなど、注意すべき点が多くあることを学びました。今後は、実際の病院で患者さんに処置をさせていただく機会も増えていくため、常に相手は患者さんであることを忘れず、一つ一つの実習に真剣に取り組んでいきたいです。

また、私は1年生の頃から新潟大学管弦楽団に所属しています。中学生の頃から音楽を続けており、大学でも大人数で一つの音楽を作り上げる楽

しさを感じています。年に2回の大きな演奏会に向けて、合奏や個人練習を重ね、自分たちの力で演奏を完成させています。医療系学部だけでなく五十嵐キャンパスの学生も多く所属しているため、多様なコミュニティに参加することができ、コミュニケーションの幅も広がりました。さらに、会計やパートリーダーといった役職を任せていただき、学業だけでは得られない貴重な経験を積むことができています。

2年生を振り返ると、学業が忙しくなり、実習やテストに対する不安を抱える日々でしたが、友人と支え合いながら、部活動やアルバイトなど、さまざまなことに全力で取り組むことができた一年だったと思います。来年からは福祉の勉強も本格的に始まり、さらに不安を感じることもあるかもしれませんが、仲間を大切にしながら、これからも努力を続けていきたいです。



演奏会での1枚

歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 田邊史歩

皆様いつもお世話になっております。この度は歯学部ニュースの執筆の機会をいただきましたので、3年生になってからの日々について紹介させていただきます。

後期に入り、社会福祉分野のPBLの時間が増えたことで、学びの内容だけでなく、人との関わり方にも変化がありました。PBLでは少人数で話し合いながら課題に取り組むため、これまであまり話す機会のなかった友人とも自然と会話を交わすようになりました。話し合いの合間には、好きなアイドルやドラマ、趣味などの話題も出るようになり、これまで知らなかった友人の一面を知ることができ、とても楽しく感じました。そのような交流を通して、クラスメイトとの距離が縮まり、仲を深めることができた点は、後期の学びにおいて特に良かったと感じております。

PBLでは、提示された課題に対して単に答えを導き出すのではなく、疑問を持ち、仮説を立て、課題として整理することが求められます。その過程において、普段の生活では疑問にも思わなかった事柄について調べ、考える機会が増えました。「なぜこの制度が必要なのか」「他にどのような支援方法が考えられるのか」といった視点を持つことで、自身の思考の幅が広がったと感じていま

す。

また、制度や支援について検討する際には、根拠となる法律から調べるようになりました。根拠法を確認することで、制度の内容だけでなく、その背景や目的、対象者の位置づけについても理解する必要があることを学びました。法律に基づいて考えることで、支援の意義や限界を意識しながら検討できるようになり、より深い学びにつながっていると感じております。

二月からは、社会福祉士としての臨床実習が始まります。実習先では障害のある方と関わる機会が多く、これまで日常的に接することのなかった方々との関わりに対し、不安や緊張を感じております。しかし、これまでの講義やPBLを通して学んできた「相手の立場に立って考える姿勢」や「丁寧に話を聴くことの大切さ」を意識しながら、一人ひとりと誠実に向き合っていきたいと考えております。

さらに、4年生からは本格的に臨床実習が始まります。これまで学んできたことを思い出し、実践に活かしていきたい気持ちはあるものの、自身の力不足を感じ、不安に思うことも多くあります。それでも、これまで積み重ねてきた学びを大切に、振り返りを行いながら、一步ずつ成長していきたいと考えております。今後も学び続ける姿勢を忘れず、学生生活と実習に真摯に取り組んでいきたいと思っております。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 高橋美桜

歯学部に入學してからすでに2年半が経ち、残す学生生活は1年半となりました。入學してから今日まであっという間に過ぎ、時の流れの速さに驚いております。今回、「歯学部生の今」というテーマのもと、3年生になってからの日々を振り返りたいと思います。

3年生になり、歯科の講義に加え、福祉分野の学習が本格的に始まりました。福祉の講義では保険のことや年金のことなど、内容は難しいものも多いですが、将来必ず役に立つ知識を学ぶことができ、とても充実しています。福祉の講義が始まったことなどから3年生はほとんど毎日1限から講義や実習が入っていたり、国家試験の過去問提出が毎月あったりと2年生の頃と比べて格段に忙しくなりました。時間に余裕のあった1年生や2年生の頃にアルバイトや勉強にもっと力をいれておけばよかったと、少し後悔することもあります。

また、10月からは新潟大学医歯学総合病院での臨床実習が始まりました。教科書で学んできた知識がどのように患者さんの診療に活かされているのかを間近で見ることができます。病院実習ではわからないことが多く、自分の知識不足を痛感しあたふたしてしまう場面もあります。しかし、病院で働く歯科衛生士や歯科医師の方々に支えていただきながら、歯科衛生士としての業務を学び、少しずつ成長できていることを実感しておりま

す。そのたびに「もっと頑張ろう」という気持ちが湧いてきます。医療者としての立ち振る舞いや言葉遣いなど、臨床でしか学べない多くのことを経験することができとても充実した時間を過ごしています。午前の病院実習が終わると友人とのお昼ご飯の時間が待っています。最近はローソンの新商品をチェックすることが友人との間でのちょっとした楽しみです。友人とローソンで買ったお昼ご飯を食べながら今日の実習の話やささいな世間話をして過ごすお昼の時間はとても楽しくて日々の活力となっています。

私が所属している管弦楽団では12月に定期演奏会としてリューとぴあにて演奏を行いました。チャイコフスキー交響曲第6番の演奏が終わった後、達成感と感動で胸がいっぱいになりました。3年生である私はこの演奏会をもって現役回生は終わりとなり、今後はより一層学業に励む時間が増えました。私はこの部活動で初めてチェロという楽器に挑戦しました。新しいことに挑戦する楽しさや大勢の人と音楽を奏でる楽しさを知ることができ、とても貴重な経験であったと感じています。

4年生になると歯科、福祉の実習がさらに本格的に始まります。不安でいっぱいですが、クラスの仲間と励まし合いながら1日1日を大切に過ごしていきたいです。そして、歯科衛生士と社会福祉士のどちらでも活躍できるようなスキルを身につけたいと思います。また、残り少ない学生生活を後悔のないものにするため、学業にも日常生活にも全力で取り組み、思い切り楽しみたいです。